

山口大学研究プロジェクト
コロナ危機と時間学 ～新型コロナウイルス感染症と私たちの過去・現在・未来～

研究成果報告書

主研究者	安達圭一郎	所属	大学院医学系研究科保健学専攻
共同研究者	矢田浩紀 山口県立大学看護栄養学部精神看護学専攻 大達 亮 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻		
研究課題名			
長引く新型コロナ感染症（COVID-19）に対する一般市民の病気不安及び病気認知の過去と現在～時の変化にマッチしたメンタルヘルス支援を目指して～			
研究内容と成果の概要			
<p>問題・目的： コロナ感染症（COVID-19）パンデミック下では、疾患としてのあいまいさや感染阻止のための行動制限により、人々は身体面のみならず心理面でも大きな影響を受けた（Pfefferbaum & North, 2020; Tanaka & Okamoto, 2021 など）。一方で、心理面への影響には個人差があることも指摘されており（Zacher & Rudolph, 2021）、我々は2020年9月（第2波初期）にCOVID-19に対する不安や恐れ（感染不安）やCOVID-19に対する脅威の認知（病気に対する脅威の認知）が、一般市民のメンタルヘルスにどうかかわるのかを調べた。その結果、感染不安や病気に対する脅威の認知は心理的苦痛と深く関連することが示唆された（安達ら 2021）。その後約2年が経過し、感染の増減が繰り返される中、ウイルス株の変化、予防ワクチン接種などに伴い我々の生活様式も大きく変容した（社会経済活動の増加等）。</p> <p>本研究では、一般市民の感染不安や病気に対する脅威の認知、さらにはメンタルヘルス（心理的苦痛）との関連性について現在の状況を再調査し感染当初の結果と比較する。そのことで今後（未来）に向けた一般市民のメンタルヘルス対策や感染予防対策のための示唆を得たい。</p> <p>方法： 第1回目調査（2020年9月）に応じた一般市民550名に第2回目（2023年1月）の追跡調査をおこなった（有効回答数274名、回収率50%）。調査内容は、個人属性、感染不安（FCV19S）、病気に対する脅威の認知（B-IPQ）、心理的苦痛（K6）、個人のおこなうコロナ対策などであった。</p> <p>結果及び考察： 第1回目から第2回目にかけて一般市民の感染不安、病気に対する脅威の認知は有意に低下した。一方、心理的苦痛のレベルに変化はなく、パンデミック前の水準と比較すると高止まりの傾向にあることが示唆された。また、第1回目、第2回目調査結果に交差遅延効果モデルを適用し、感染不安、病気に対する脅威の認知、心理的苦痛のレベルについて因果関係を推定した。その結果、感染不安が、病気に対する脅威の認知や心理的苦痛のレベルに影響することが判明した。さらに、重回帰分析をおこない現在の感染不安に関連する要因を見ると、家庭の経済状況や個人のおこなう周囲との接触回避が認められた。</p> <p>以上より、人々のメンタルヘルス問題（心理的苦痛）は感染不安の低下とともに落ち着くことが予想される。そのためには、国が行う経済対策や人々の交流促進が重要である。</p>			

研究進捗状況・研究成果の公表状況等

論文、学会等発表、実データの利用状況、研究の有用性を広めるための活動など

2023年4月：コロナ危機と時間学，第1回定期ワークショップ報告

2023年度中：投稿論文執筆中

その他特記事項